

我らの使命

序

第一編 自覚

我の発見

発奮努力

第二編 使命

宿命より使命へ

光明団の使命

第三編 団結

一死団結

殉教

第四編 苦闘

堅忍不拔

苦杯か甘露か

第五編 大乘菩薩道

積尊の正覚

無我の実践と提唱

第六編 親鸞教の概要

本願他力

宗教生活

第七編 結論

真理に忠実なれ

血盟、結束

序

世は希望に燃える春である。力に躍る春である。私は今、石見路の旅をつゞけていく。講演の暇々に「我らの使命」をやつと書き上げた。憶えば、大正八年初めて光明団が孤々の声を挙げてから星霜ここに十有五年、雨の日も風の日も、私の一切は団の発展の上に注がれて来た。ある時はあまりの受難に倒れるかと思つた。ある時はあまりの悲惨に行きづまるかに見えた。けれども何時しかに光明団も十五歳になり、今元服して一人前の若者になろうとしている。

時代の流れは、決して冷淡ではなかつた。社会は私たちの上に何をなすべきかを教えた。我らは与えられたる使命をはつきり自覚すると共にそれを受取らねばならない時が来た。使命がはつきりするとは、進むべき道がはつきりすることである。切つても切れぬ同胞たちが、光明団の使命が何であるかを私を通して語るのだ。

本書は同胞たちの声が私の胸に沸騰して、やがて私の声として出たものである。本書が生れるより先きに本書が示すが如き歩みがすでに同胞のうえにあつた。私は本書を光明団創立十五周年記念塔の一つとして同胞の机上に贈ることが出来たことを喜びとする。

本書が若き同胞たちの手に緋かれた時、眠っていた魂はよびさまされ、覚めた魂は起ち上り、各地に正法の殉教者が根強い歩みを歩み初めることを信ずる。私は一人でも多くの青年同志の手にお贈りしたい。そして一人でも、我らの人生が何であるか、生活の意義と権威は奈辺にあるかを知つてくれる方が多いことを熱望してやまない。2 各地の先駆者たちは、能う限りの奮発によつて、本書を青年の手に渡して頂きたい。

本書を手にする同胞よ。私はあなたが、町の、野の、山の、浜辺の一角に、必ず奮起して警世の鐘の打ち手となり、やがてそこに血盟結束の団結が生れ、それが波及して大きな大同団結の生れることを信ずる。天地は悠久にして人の命は短い。醉生夢死、ただぼんやりと消えてゆくにはあまりに高価な人生である。覚めた若人の魂の声はそれを許さないのであろう。ただ真剣に一貫した念願を追いつゞけてゆく人へののみ、重き使命は托される。本書がもし、若人の心の琴線にふれて、宿命から使命へ、生存から生活への一大転換の契機となり、その善友知識ともなれば幸甚の至りである。

昭和八年三月二十一日

住岡狂風 識

第一編 自覚

我の発見

私がまだ、二十二歳の時、それは広島市を去ること六里、飯室小学校の首席訓導となつて転任したばかりの時であつた。

段々と暗くなる心、何が何やらわからなくなつた心、それでも世間的に先生らしい顔をした心、複雑な心を持つた私は、私の心の声を聞かねばならない時が来た。二十二歳。俺は今、二十二歳、ああ、二十二歳の秋だ。それが今日まで、何をしたか。今俺が斃れたら、汝の一生涯は何であつたのか。

私は矢も楯もたまらなくなつた。

恥しながら、極端にまで、地位と名誉、立身出世と、女とのほしかつた、気の毒なほど貧弱な子は、この子に課せられた、宿命らしい灰色の現実の中に「自己」を発見したので。

暗い頃から起きて、読書しはじめたのは、然り二十二歳の秋からであつた。

あれを見よ。歴史の上に輝く、古今の聖者、偉人、英雄を！

彼らはいつたい、何を知り、何を信じ、何を語り、何を教え、何を生活したのか。

同じ太陽を仰ぎ、同じ空気を吸い、同じ水を飲んでいて、私だけは、何かしら大きな流れに参加せずしてこのまま地上を去つてもいいのか。

3

いつたい、汝にとつて一番大切なのは何か。

汝にとつて一番、尊ぶべきは何であるのか。

「それは汝自身ではないか。」

然り、汝自身だ。それであるならば、汝は汝を解け、これ汝に与えられた課題ではないか。

汝は今、二十二年の長い間を生きた。

しかして汝の獲たものは何であるか。汝が汝のものとして示しうるものは何であるのか。

無一物！ そうだ、何もないのだ。しからば二十二年の生涯は、きれいに棒引きである。零である。

こうした悲痛な自己発見の中から、第二の私が生れた。努力の私が、苦闘の私が、そして今日の私が。

あえて問う。君は今何歳なりや。

「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも、留め置かまし大和魂」

「親思う心にまさる親心 今日のおとずれ何と聞くらん。」

安政六年十月二十七日、千古の絶唱を残して処刑せられ、不朽の人となった吉田松陰先生は何歳であったと思う。わずか二十九歳であったことを記憶すべきである。

あえて問う、君はいま何を考えつつありや。

その過去を問うのではない。年若き君が今何を考えつつありやと問うのである。洋服のきれいなのが一着ほしいと思りにいます。どうしたら、月給が上ろうかと考えています。そろそろ貯金しておかないと老後が困ると思つています。先日ある人から打たれましたから、今度どこかで意趣ばらしをしてやろうと思つています。： 咄！言うをやめよ。

聖親鸞は君の年に何を考えていたか。

吉田松陰は君の年に何を考えていたか。

世界の発明王エジソンは、日本の世界的大学者野口英世博士は、悟道と修養における日本の第一人者僧道元は、英傑豊臣秀吉は……君の年にいつたい、何を考えていたのであろうか。

「拳世一士無し。我を放つて第一流となす。わが名誠に朽ちず。何をもつて神州に報いん。」

これは吉田松陰の自覚であつた。世の中をいくら見渡しても、真実の志士らしい人間は一人もいない。それゆえに仕方なく第一流の人物となつてその名は永久に伝わるのだ。いつたい何を以て日本の国に報いよう、というのだ。恐るべき自覚ではないか。

松陰の残した手紙一本すら、数百千金の金を出さねば買うことはできない。

しかもその書を、その手紙を家宝として秘蔵する者はある。だが松陰のごとき自覚と、生活と活動とを、習わんとする者一人もなし。

自覚しない者に、深い考えはない。

深い考えのない者に、寸陰を惜しんでの努力精進はない。

努力精進のない者に、向上はない。考えなくて深くなるうはずがない。

あえて問う。君は今、何をなしつつありや。

一人の青年があつた。その行為を見て訓戒した。青年はこの忠告を入れないで去つた。それから十年目、彼は刑務所から後悔の手紙をよこした。

一人の壮年男があつた。ある事で彼のあまりの欲張りを苦々しく思った。彼は酒の上の争いで、人をなぐり大負傷をさせて、行くべき所まで行つた。

自動車も、もし自動車であることを忘れたら、必ず、大事件をおこす。

人が、もし人であることを忘れたら、大問題をおこす。

人、向上しなければ、必ず墮落する。

再び問う。今日何をなしつつありや。

今日、勉強しないで何時の日、学ぼうとするのか。

今日、発奮せず、自覚せず、求道せず、社会のために尽くさずして、何時それをなそうとするのであるか。

何よりも大切な「我」が、罪悪の中に埋れたままになつてはいないか。

汝、何歳なりや。

汝、今、何をしつつありや。

汝、今、何を物しつつありや。

我は今地上に、しかも日本に生きている。それを忘れていて、他の一切の問題がない。

汝、汝を発見せよ。

発奮努力

「山の険かつ峻に、人越ゆる能わざるもの、我すなわちしようよう従容としてこれを越ゆ。しかして体勞せず。水の深かつ険に、人渉り能わざるもの、我すなわち従容としてこれを渡る。しかして足濡れず。およそ天下の至難至険、人為す能わざる者、我皆5従容としてこれを為さん。」

これは吉田松陰の自信である。意気である。いかなる困難でも、決してこれに敗北しない自覚である。

我を発見するとは、衷心の願いを発見することである。

魂の本願を発見した者は、必ず願いのまにまに発奮し、努力する。

発奮努力以外に何物もその人物を造らない。

孔子聖人、世界永遠の大聖孔子はいかにして生れたか。彼の父しゆくりようこ叔梁紇は、彼が四つ5の時、早くもこの世を去つた。貧しい女の手一つによつて育てられた。幼い彼は學問が好きであつた。成長するに従つていよいよ彼の願いははっきりした。「我十有五にして学に志す」「全人類のために、古の聖道王道を明らかにせねばならない。」努力は発奮から生れる。

当時の支那は、周の王室が衰えて、諸侯が各地に割拠し、皆が皆、己れの利欲と権勢をめざして、戦乱はおこり、虐政ははびこり、正しい人間の道は地に埋れていた。

何時の時代でも、その世相に反映して二つのものが表われる。時代の悪い相にひきこまれて、暗にはびこる人々と、世を歎いて時代の悪を救う者と。家貧しきがゆえに無頼漢も出で、家貧しきがゆえに孝子も現われる。

理想に燃える青春の胸に高く波うつ発奮と努力、王道すたれた社会は、ますます孔子の胸に高き高き道へのあこがれを与えた。

彼は二十歳にして結婚した。結婚した翌年に、初めて季氏の庫番くらばんとして仕えた。卑しい職であつても、彼の仕事は立派であつた。この年、妻は男児を生んだ。魯の昭公が、お祝いとして鯉を贈った。生れた子に「鯉」という名をつけたことを見れば、この贈り物がどれだけ彼を喜ばしたか。彼はその翌年、庫番から、牧場の役人に転じた。彼はここでも、ただ全我をあげて努力した。——ああ。後の大聖も一度は、庫番であり、牧場の役人であつた。青春の血高鳴る若人の胸に何とひびくか。

親鸞聖人。四歳と八歳に、父と母とを失い、九歳の春出家して叡山に登り、勉学修道二十年、いまだに自覚の根源をつきとめえなかつた彼は、二十九歳の春、暗い胸を抱いて、夜な夜な叡山より京の六角堂へ、三里半の道を往復して、百夜の祈願をこめた。

彼の生きる他力本願は、全人格的努力精進の中から生まれたのだ。

エジソン。米国デトロイト市の図書館に、雨が降つても、風が吹いても姿を現わさない日はない一人の少年があつた。彼はトマスと云つた。この熱心な少年に向かつてある日一人の紳士は尋ねた。

「君は毎日熱心に来ているね。いったいどれくらい読んだかね。」

「十五フィート読みました。」

「十五フィートというのはおかしいね。君は棚の本を片つ端から、みんな読んでゆくのかね。本というものはそんなに乱読したのでは精力を浪費するだけだよ。」

彼はそのころ新聞の売り子だつた。

この少年こそ全人類の大恩人、トマス・エジソンである。今世界に一人でも彼の恩恵を受けない文明人がいるだろうか。

彼は一日二十四時間中、四、五時間より多く休息の時を持たなかつた人だ。真夜中の午前二時、今これを書いてある私の前に彼が全世界に贈つた最大なる利益の一つである電燈が明々と輝いている。

聖者、偉人、大発明家、学者、大芸術家。……いやしくも人類の大恩人、美しい文化の華、否、少しでも世の中の人間らしい人間で、発奮なく、努力なくしてできたものが一人でもありえたであらうか。

「学問があつても、就職難はまぬかれぬ。」それが、今日の怠惰の言いわけにはならない。社会の真の指導者は必ず発奮努力の人のの中から生れる。

「社会が悪い。こんな腐つた社会で働けるか。」だがよくこの種の人に言つておく。どんな社会が生まれても、この種の人を歓迎する日の来ないことを。シベリヤの駅で働いている仲仕を、そのまま日本駐在の全権大使にすることができるか。「家が貧しいから。」それに同情する。だが、二宮金次郎の話を生かそうではないか。何年百姓をしても、土壌に対する知識すらもなく、この人あるがゆえにこの村は力強く明るく

なつたと聞かないのは何事か。村の小学校の図書館の書物を何冊読んだか。あなたがいるために、村がどれだけ向上したか。よくなつたか。山口県長府の乃木大将の旧宅に行つて見よ、白の横の棚には大将が幼時、白をつきながら読まれた四書がのつている。

「頭が悪いから。」それが君の不勉強の理由なら、こうした話を一つする。

イシドールとよぶ一人の少年が、不良少年の群から脱出して、ある日の夕方、とある井戸ばたに立っていた。ふと石で造られた井戸側の上を見ると、一ヶ所大変ひどくくぼんだ所があつた。一人の少女が水をくみに来た。桶をたらすのにも、引きあげるにも、そのくぼんだ溝の中を繩は通つた。柔らかな繩でも毎日こすつていけば、石に溝を造る！「この柔らかな繩さえ、石に溝をつける。頭の悪いくらいがなんだ！毎日勉強したら、必ず賢くなれる。」

彼は発奮した。そして努力した。後のスペインの大学者、聖イシドールの幼時である。頭が悪ければ、人が一度でわかるものを二度、二度でわかるものを四度、五度くりかえそう。大和国高取の城主、植村出羽守朝散大夫家敬公をその荒屋あほらやまでひきつけた、大和の孝子ほとけ仏清九郎は、その幼時は一文足らぬかとさえ思われる男であつた。不断の求道はここに一人の聖者を造つた。